



高校野球のマナーとルールを学ぼう (第26回)



一般財団法人兵庫県高等学校野球連盟

グラウンドでの試合を振り返り、高校野球の大切なマナーとルールを学びましょう。
あなたの「なぜ? どうして?」にわかりやすくお答えしていきます。

マナー編 気になるグラブのひも

テレビの画面に、投手のグラブからぶらぶらと長い絞めひもが映ります。目ざわりですが問題はないのでしょうか。

日本高野連の『高校野球道具の使用制限』には、第12項の後半で、「しめひもは長すぎないこと。親指の長さ程度にすること」と明示されています。プロ野球の投手が小指の部分の間隔を調節する意味で、ひもの長さに余裕を持たせたのが流行(はやり)になっているのが現状のようです。高校野球ではありませんが、タッグプレイで、滑り込んできた走者の目をひもが直撃して失明した事故も報告されています。長めのひもでも、きちんと編むように整えて最後の処理をすれば起こらなかった事故です。悔やんでも取り返しはつきません。現場で目に留まれば、本部役員や審判委員から注意を促しますが、大切な道具の手入れと確認は各自の責任です。

新しいシーズンが始まります。各項目に関するペナルティーはありませんが、何より「守ること・気をつけること」の意味を考えてみましょう。『使用制限』に関しては日本高野連のホームページで確認してください。

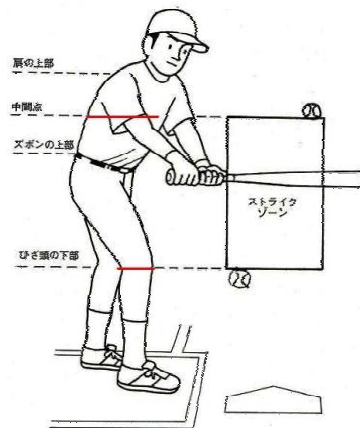


ルール編 ストライクゾーンとストライク

実況中継で、「この打者のように低く構えられると、ストライクゾーンが決定しにくいですね。」とコメントがありましたが、ストライクゾーンはどのように判断するのですか?

規則 2・74 には『ストライクゾーン』が定義されています。「打者の肩の上部とユニフォームのズボンの上部との中間点に引いた水平のラインを上限とし、ひざ頭の下部のラインを下限とする本塁上の空間をいう。このストライクゾーンは打者が打つための姿勢で決定されるべきである。」との記載があり、イラストで示したのが規則書6頁の図です。先立って規則2・73には、「次のような、投手の正規な投球で、審判員によって、“ストライク”と宣告されたものをいう。」と規定し、その(b)には、「打者が打たなかった投球のうち、ボールの一部分がストライクゾーンのどの部分でもインフライトの状態通過したもの。」とあります。この両項により、本塁上の空間からそれぞれ上限、下限を切り取った五角柱の一部分をボールが通過し、審判員が「ストライク」と宣告した正規の投球が『ストライク』の定義です。イラストでも明確なとおり、ストライクゾーンは打者が投球を打つための姿勢で決定されます。その前の構え方はどうであれ、また、バントの構えをしても基本は変わりません。

「STRIKE!」という宣告は、「Good Ball, Strike(=良い球だ、打て!)」が原義だそうです。投球を打つことからゲームは始まりますが、ストライクゾーンの習得は、このゲームに携わる者すべてが肝要としなければなりません。なお In Flight(インフライト)は、規則 2・41 に「打球・投球・送球が地面かあるいは野手以外のものにまだ触れていない状態を指す。」と説明されています。



投手側の肩の上部とズボンの中間点からひざ頭の下部